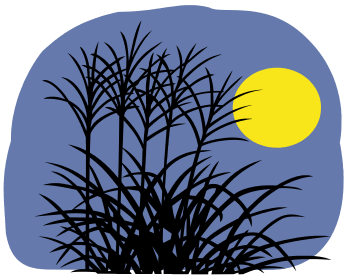

説教要旨「行き先も知らない旅立ち」

使徒言行録７章１～１６節

ステファノは最高法院に連行され、裁判にかけられますが、そこでステファノがなした弁明が７章全体で展開されています。それはアブラハムから始まって、イサク、ヤコブ、ヨハネ、そしてモーセと、イスラエル民族の歴史そのものです。

ステファノの言葉によれば、アブラハムがまだメソポタミアに居住していた時に、神の方からアブラハムに呼びかけ、慣れ親しんだ土地から旅立つように命じました。その時、アブラハムはその行き先を知らされませんでした。それでもアブラハムは、この神の呼びかけに応じて、アブラハムは「行き先も知らずに出発し」て行ったのです。

イエス様の弟子たちも、自分から弟子に志願したのではなくて、主の方から彼らを弟子として召し出し、それに応じて従っていくことで、弟子とされていきました。しかし、イエス様から召し出されるとは、安楽な道を歩むのではなくて、むしろそのゆえに苦労し、苦しむことをも意味します。それは自分の十字架を背負うことでもあるからです。

わたしたちは、これから先のことを考えると心配ばかりが先に立ちます。親のこと、子供のこと、仕事のこと、老後の生活と心配の種は尽きることなく積み重なってきます。また、感染症に脅かされる中で、１０年後、２０年後どころか、来年の見通しすらはっきり見えない。そんななかをわたしたちは歩んでいます。しかし、「わたしについてきなさい」とわたしたちを召し出された方が、わたしたちの将来の責任をもってくださるのであるなら、あれこれと心配する必要はないはずです。

「わたしについてきなさい」とわたしたちをわざわざ呼び出された方が、共にいてくださることを約束してくださり、これからの道をきちんと整え、導き、守っていってくださいます。「ついてきなさい」と呼び出された以上は、その方がわたしたちのこれから先のことについては責任をとってくださるのです。だからわたしたちは、アブラハムが、「行き先も知らずに出発し」たように、安心して、この方についていけばよいのです。

（２０２１・９・２６　説教者：稲垣真実）